

義務と視点

堂本学

内容

義務と視点.....	1
小学・中学が「義務教育」である理由とは？そもそも学校は行かないとダメ？登校したくない人が読むページ.....	4
まとめ.....	8
著者：つかさ.....	9

『筆者：堂本 学』は段ボール通販の[アースダンボール](#)を応援しています。

小学・中学が「義務教育」である理由とは？そもそも学校は行かないとダメ？登校したくない人が読むページ

最近是不登校を問題にしているユーチューバーが目立ちますが、学校に行く意味とは何でしょうか？確かに、学校は義務ではないので、子供視点で考えると行く必要はありません。しかし、学校は意味があって存在しているのは事実であり、意味がないなら現在まで存在しているはずがありません。

本記事では、小学・中学が「義務教育」である理由や、学校で学ぶことができる内容についてもお伝えしていきます。学校と言っても「私立」「公立」の種類がありますが、本記事では「私立」の学校について話を進めていきます。

小学・中学が「義務教育」である理由とは？そもそも学校は行かないとダメ？不登校の子供にはフリースクールが一番！

学校で学ぶことができるのは何？人との付き合い方忍耐と発想力を養うルールを守らないといけないことを学ぶ集団生活で生き抜くための方法を学ぶ学校とは？

筆者の見解何でも親に言ってくれない場合の対処法学校に行くのは当たり前ではない！親は子供を守る義務があるまとめ小学・中学が「義務教育」である理由とは？学校制度は、社会システムの一つであり教育制度の中心的な存在です。

一般的には、社会に出るための基礎やマナー、団体生活をする上での暗黙のルールを理解するための施設と筆者は考えています。学校と言っても「義務教育学校」と「小中一貫校」というのがあり、それぞれ教育方針が異なっているのです。

ただ、「義務教育」という言葉が使われているので、多くの人が勘違いをしています。学校に行くことは子供の義務ではなく、行く必要はないということです。義務教育については、日本国憲法第26条で以下のように記されています。すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。

引用元：日本国憲法逐条解説「保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ」とある通り、親は子供に義務教育を受けさせるという責務があるということです。逆に言えば、子ども自身には学校に行く義務は無いですが、親としては学校に行かせる義務があるということになります。むしろ、学校に行かせないで、毎日子供に働かせるような行為をさせる親は、義務教育に反していると言っても良いでしょう。

しかし、これは児童生徒が学校に行きたいという意味があるにもかかわらず、大人がそれを阻止するというケースです。

逆に、正当な理由があり児童生徒が学校に行きたくないという場合は、どうなのか気になるところではないでしょうか。たとえば、入院や怪我などで長期欠席をする場合は、本人に学校に行く行かないというより、学校に行くのが困難なので「出席させない」という、正当な理由になります。

ほかにも、最近「いじめ問題」がニュースでよく取り上げられていますが、いじめによる

不登校も正当な理由となります。文部科学省の就学義務督促の仕組みのホームページを見ても、不登校は法律違反ではないと明記されているのです。

つまり、正当な理由があれば、不登校でも親は法律違反にはなりません。そもそも学校は行かないとダメ？ネットでは、不登校というニュースが出ると「学校に行け」というコメントが、多数書き込まれることがあります。

しかし、学校は義務教育と言いますが、子供は学校に行く義務は発生していません。さらに、正当な理由がある場合は、学校に行かなくても家でも勉強はできるのです。

何らかの理由で学校に行きたくないというようになった子供に対し、無理に学校に行かせないほうが良いです。無責任な人の意見を見ると「無理にでも学校に行かせろ」「学校に行かせないほうが良い」とそのように言う人もいます。

しかし、学校に行きたくない理由が「いじめ」出会った場合は、無理に行かせた結果が自殺につながる可能性も否定できません。筆者なら子供が学校に行きたくないと言い始めたら、話し合いの時間を設け場合によっては学校に行かせない選択を取ります。学校に行かせなくても、今の時代は家でも勉強は可能です。不登校の子供にはフリースクールが一番！クラスでいじめられているとか先生が苦手だという子供も、実際にいますし不登校につながっているケースも多いのではないのでしょうか。

色々な理由から学校に行きたくない状況になり、引きこもりになる子供が増えています。不登校の子供に対し復学や進学への道は、難しいというイメージはかなり強いのではないのでしょうか。現在は不登校の子供に対しても、サポートしてくれる教育機関はたくさんあります。その中でも、小中高生の学びの場となっているのが、「フリースクール」なのです。

フリースクールとは、何らかの理由で学校にいけない子供に、小学校・中学校・高校の代わりに過ごす場所です。フリースクールは、不登校や引きこもりはもちろんですが、軽度の発達障害、身体障害、知的障害などの子供たちも受け入れています。

個人経営のフリースクールもありますが、NPO法人やボランティア団が運営している教育機関もあるのです。それぞれ、方針や教育理念が違いますし、形態も色々あります。

さらに、費用も一律していないので、費用が安いフリースクールを探すと良いかもしれません。学校で学ぶことができるのは何？学校で学ぶことができるのは、各教科の授業だけではありません。では、どんなことを学校で学べるのかを紹介していきましょう。

人との付き合い方学校にはいろいろな人が集まり、様々な性格の子供たちがいます。そういう人たちと、どういう風につながるのかを学校では学べるでしょう。確かに、大人になってからでも学べますし、不登校でも人とのつながりに関しては少なからずあるかもしれません。

しかし、多くの場合は何らかの施設や会社で、初めて出会う人が多いです。そういう人たちと、どのように接すれば良いのかを学べるのが、学校と言えます。

人と話をする場合にも、相手を不快に感じさせない話かたも学校で学べるのです。クラスの中で、独りぼっちであったとしても、先生と話す機会はあるでしょう。忍耐と発想力を養う

学校で学べるのは、忍耐もその一つと言えます。たとえば、数学の問題を諦めずに解くという行為も、忍耐力を養う一つの方法だと言えます。

他にも、学校にはいろいろなイベントが発生しますが、新しいアイデアを多くの人と出し合い、何が良いかを決めるのも良い勉強になります。自分のアイデアをアピールするのも、将来的に見てもプレゼンをするときに役立ちそうです。

ほかにも、他人の考えたアイデアを直接見ることができるので、自分も頑張っって良いアイデアを出そうと頑張れます。そういう風に考えると、学校では忍耐と発想力を養うことができるのではないのでしょうか。ルールを守らないといけないことを学ぶ学校にはいろいろなルールがあり、守らないといけないこともあります。

ただ、学校の校則には、おかしなルールも混じってますが、それは論外とさせていただきます。さて、学校のルールを守ることについては、意味があるのです。どういう意味があるのかと言えば、マナーやルールを守る意識を育てるという意味です。

もし、学校のルールを守らず、自由に生きるとすれば、社会は無法地帯と化してしまいます。基本的に、ルールとは戦争や犯罪など、暴力しかない世界にするために、人の心に制限をかけるものです。

学校のルールとは、そうした社会のルールを守れるような人間にするために、子供のころからルールを守るということを教えるわけです。確かに、「人の命を奪うのは悪いことと誰もが知っている」という意見も、中にはあるかもしれませんが。

しかし、そういう常識を持つ人は、ルールを守っているしマナーも知っていることが多いです。人の命を奪うことが悪いことと知らない人は、平気で人を見下し、集団で特定の人物を徹底的に、いじめるのでしょうか。そう考えると、「人の命を奪うのは悪いことと誰もが知っている」というのは、全く当てはまらないと言えます。

つまり、ルールを守る意識を養わせるのは、人の心を制限させ社会を無法地帯にさせないためでもあるのです。集団生活で生き抜くための方法を学ぶ学校では色々なイベントがありますが、子供たちの心を一つにさせるイベントもあります。

たとえば、学園祭や運動会など、いろいろとあるでしょう。ほかにも、部活なども心を一つにできる学校のイベントの一つと、筆者は考えています。集団行動をすることで学べるのは、能率的に行動をして周囲の状況を見極める力を養えます。

集団行動をあまりしていない人は、社会に出ると能率的に行動できず、周囲の状況すらも見極められない人間になってしまうのです。ちなみに、能率的とは、無駄のない動きという意味です。

学校とは？筆者の見解最終的な結論ですが、筆者は学校に行くのは当たり前ではないと考えます。不登校になった生徒は、何らかの理由で学校に行きたくないという結論に至っているのです。

筆者の学生時代は、「いじめ」があっても見て見ぬふりの先生はいましたし、教え方が悪い先生も実在していました。さらに、何を思ったのかホームルームではギターを持ち出し、歌

い始める先生もいたくらいです(笑)筆者が学生のころは「いじめ」は「いじめられているほうが悪い」ということが、平気で言われていた時代でしたね。

ただ、最近になって「不登校」というキーワードが登場し、筆者は大人になってから「その手があったのか」と筆者は思ったくらいです。

子供が「学校に行くのが辛い」という場合は、話し合いの時間を設けることが一番です。ただ、「学校に行け」と説得するのは間違いで、「学校に行かない理由」を聞き出すほうが良いでしょう。学校に行かない理由を聞きだし、その理由に対して改善をしていく必要があります。何でも親に言ってくれない場合の対処法子供の性格によっては学校で、その日に何があったのかを事細かく親に話す子供もいます。

しかし、学校が辛いと考える子供は、何でも親に話すことは少ないと思ったほうが良いでしょう。親のタイミングで何とか聞き出そうとするのは逆効果ですし、自分の部屋に閉じこもってしまう可能性もあります。なので、彼らが離れたいと思うタイミングを見極め、そのタイミングで聞き出すのが一番です。

じゃあ、「そのタイミング」とは、一体どういう時なのでしょう。筆者の経験では、自分から親に近づいたり、親のいる居間などに長居をするときです。この時のサインを、絶対に逃さないようにしましょう。このタイミングを逃してしまうと、聞けるはずだった情報も聞けなくなります。

さらに、このタイミングを逃すと「親は自分のことを気に留めない」という、否定的な考えを与える結果になります。子供はどんな大人に対しても、全てを教えるわけではありません。友人や学校の先生など、色々なところで話をする情報を統合すると、子供が抱えている悩みが見えることもあるのです。

学校に行くのは当たり前ではない！1984年くらいは、学校に行くのが当たり前で熱が出た時くらいしか、学校を休ませてもらえない時代だったのです。つまり、昔は学校が辛いという理由では、学校を休む理由にはならなかったと言えますね。そのような世代は、「学校に行くのは当然」という考えなので、学校に行かないという理由が「いじめ」であっても、「なぜ？」となるのです。

筆者も「学校に行くのが当たり前」と言われていた世代の人間ですが、学校に行くのは当たり前とは考えていません。子供が「学校に行きたくない」という場合は、どうしていきたくないのかを理由を尋ねるでしょう。

それが「いじめ問題」である場合は、子供を守るために学校には行かせず、家で勉強をさせますね。学校に行かない理由は様々ですが、「学校に行かせなければいけない」「怠けさせてはいけない」「勉強が遅れる」という思いから、目の前にいる学校が辛いと感じる子供に、辛く当たるのは間違っています。自分の思い通りにならないからと言って、自分の考えを押し付けるのは間違いですし、「お前なんて生まなければ良かった」というのも間違いです。自分の思い通りにならないからという理由で、子供の存在自体を否定するのは真の教育ではありません。学校に居場所がない彼らにとっては、家庭が一番安全な場所なのです。

さらに、不登校になる子供にとって「元気」「勇気」などは不要であり、最も大切なのは「安心できる場所」です。ただ、家庭でも居場所が無い状態にしてしまうと、自分の部屋だけが安心できる場所となり、引きこもりにつながってしまい重傷化してしまうでしょう。そうならないためにも、家全体が安心できる場所であり、何でも話し合える場所だと思ってもらうのが一番の解決策だと筆者は思うのです。

子供にとって「学校が辛い」と感じ始めてから、学校に行かないと決めたその日まで、いろんな思いをしたはずです。いきなり決断をして学校に行かないと決めたわけではないので、その過程を否定しないで認めるようにしたほうが良いでしょう。親にできることは、傷ついた子供の心をケアすることくらいでしょうか。親は子供を守る義務がある学校は義務教育ですが、子供視点で考えると学校に行くこと自体は、義務ではありません。なので、学校に行く必要はないのです。

しかし、親視点で考えると保護者として、学校に行かせることは義務だと日本国憲法第 26 条に、記載されています。とはいえ、この法律は「子供が学校に行きたがっている」「学校に行かせるだけの生活力はある」という条件が、重なったときだと言えるでしょう。つまり、子供が何らかの理由で「学校に行きたくない」という場合は、正当な理由となり義務は発生しないということになります。さらに、保護者は子供を守るという義務があります。

児童福祉法（昭和 22 年法律第 164 号）第 1 条では、以下のように記されているのです。第 1 条 すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない。2 すべて児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない。引用元：児童福祉法つまり、学校で子供がいじめにあっているなら、親として子供を守る必要があるということになります。教育基本法（平成 18 年法律第 120 号）第 10 条では、「親権を持つものは子の監護及び教育をする権利を有し、義務を負う」とも記されているのです。つまり、親は子供をお金を稼がせる道具にしないで、しっかりと教育をする権利があり、それが義務とされています。

まとめ

学校に行く義務は子供にはないにしても、不登校になる理由については話し合いをする時間を設けたほうが良いです。どうして学校に行きたくないのか、理由を知ったうえで改善していくことが大切でしょう。かといって、学校に行きたくないということもが、親から「どうして学校に行きたくないの？」と聞かれても、答えることはありません。無理に聞き出そうとすると、部屋の中に閉じこもって出てこなくなる可能性が高くなります。自分から話そうという気分させてから、話し合いをするのが良いでしょう。

著者：つかさ

日頃考えていることをつらつら書いています。少しでも共感してくれる人や日々のお役に立てばうれしいです(^▽^)/